九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社会的情報処理モデルからみた自閉スペクトラム症児の対人関係様式の変容とその要因

五位塚，和也

https://hdl.handle.net/2324/2556278

出版情報：九州大学，2019，博士（心理学），論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏　　名	五位塚　和也
論　文　名	社会的情報処理モデルからみた自閉スペクトラム症児の対人関係様式の変容とその要因
論文調査委員	主査　九州大学大学院人間環境学研究院　　准教授　古賀　聡 副査　九州大学大学院人間環境学研究院　　教授　　中村　知靖 副査　九州大学大学院人間環境学研究院　　教授　　遠矢　浩一 副査　九州大学大学院人間環境学研究院　　准教授　小澤　永治

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文では，対人関係における適応上の問題と関連して心理的混乱を示しやすい学齢期の自閉スペクトラム症児（以下，ASD 児）を対象として，対人行動とその背景に生じている心的過程を含んだ対人関係様式について検討した。

第 1 章では，ASD 概念および原因論をめぐる研究の歴史的変遷について概観し， ASD 児における他者の心や対人的出来事に対する主観的な捉え方を検討する必要があることを指摘した。本論では，発達心理学の領域において他者の心的状態の解釈から対人行動に至る一連のプロセスを検討するアプローチとして「社会的情報処理 Social Information Processing（以下 SIP）モデル」による研究アプローチを応用し，①ASD 児の対人関係様式の特徴について検討を行うこと，②ASD 児の対人関係様式に影響を与える要因について検討すること，③ASD 児の対人関係様式の変容を促進する臨床心理学的支援について検討することを目的とした。

第 2 章では，ASD 児を対象とした SIP に関する文献研究を行ったところ，定型発達児と比べて，ASD 児は不正確な符号化や非社会的な目標設定，攻撃的な反応や回避的な反応の想起，受身的反応への肯定的な評価，主張的行動への否定的な評価などが指摘されているものの，情動的側面との関連性や否定的な SIP 様式の変容の可能性について検討した研究は少なく，その点が課題であると考えられた。

第 3 章では，SIP モデルからみた ASD 児の対人関係様式の変容とその変容に関連する要因について仮説を生成することを目的として，事例検討を行った。ASD 児の対人関係様式の変容に関して，他者との親密な関係性と他者の好意に対する気づきの経験が重要な要因となっていることが考えられた。

そこで，第 4 章では，第 3 章において見出された他者との親密な関係性の要因について検討した。仮想的対人場面を用いて，ASD 児の社会的手がかりの符号化の特徴について調査したところ，ASD 児は他者の発話を解釈するときや他者への応答を決定する際に人物間の関係性に注意を向けることが少なく，教示に含まれない主観的な情報を追加する反応が多いことが示された。

第 5 章では，第 3 章において見出された，他者から向けられる好意に対する気づきの経験が SIP 様式に及ぼす影響について，第 5 章第 1 節では定型発達児を対象として調査し，第 5 章第 2 節で ASD 児を対象として調査した。第 5 章第 1 節では，敵意帰属傾向が強いほど，友好的目標設定を行う傾向が弱くなり，攻撃行動を選択する傾向が強くなり，抑制的な主張行動や無罰的行動を選択する傾向が強くなるプロセスが示された。第 5 章第 2 節では，ASD 児においても他者からの好意が明示的である条件の方が，非明示的である条件よりも，敵意帰属を行う傾向が弱く，友好的目標設定を行う傾向が強いこと，攻撃行動を選択する傾向は弱いことが示された。また，ASD 児の SIP 様式と心理社会的適応との関連性を検討した結果，社会性や抑うつや不安などの情動的な問題が関連することが示された。

第 6 章では， ASD 児の対人関係様式の変容を促す臨床心理学的支援として，他者からの好意への気づきや肯定的な情動体験に焦点化する支援が ASD 児の対人関係様式と日常生活の心理社会的適応状況

に及ぼす影響について，事例の経過と継続的に実施されたSIPの測定データを用いて検討を行った。

以上の研究から，第7章では各研究の知見の概要をまとめ，第4章および第5章の横断的実証研究の結果を総合し，ASD児のSIP様式の特徴について考察した。さらに，第4章および第5章の横断的実証研究と第3章および第6章の事例研究から得られた知見を総合し，SIPモデルからみたASD児の対人関係様式の変容とその変容のプロセスを促進する臨床心理学的支援について検討し，本論文の実践的意義について考察した。

論文調査会においては，本研究を構成する実証研究や事例研究のそれぞれの結果が示唆することと、方法論上の限界について議論が行われた。社会的情報処理モデルによって、環境との相互作用のなかで多様な発達を示すASDの対人行動の背景を理解するための視点を提示した点で本研究の学術的価値は非常に高いと考えられる。また，実証的研究で用いた仮想的対人場面における反応測定を継続的に用いたASDへの事例研究の提案は、ボディワークやロールプレイングなどの独創的なアプローチとともに意義深い研究成果であると判断された。

よって，本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。